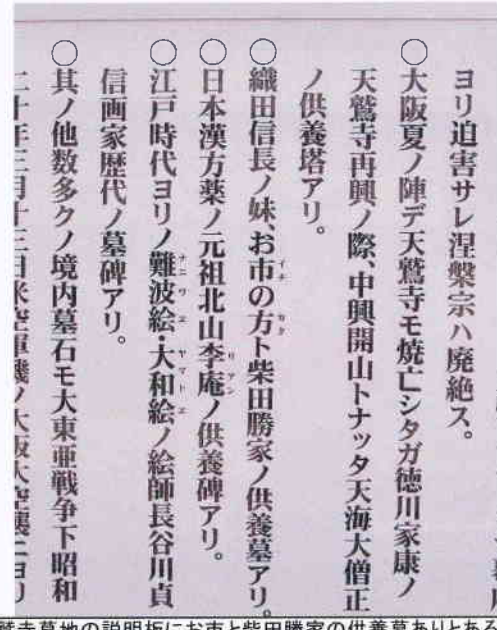


- ▶ 柴田勝家は尾張に生まれ、織田信長の弟信行に仕えますが、織田信長排斥に失敗します。謝罪し許されて信長の臣となりました。織田家随一の猛将として戦功をあげました。天正3年(1575)越前北庄城の城主となり、北陸の統治にあたりました。天正10年(1582)、本能寺の変が起こります。勝家はその悲報を受け、明智光秀追討に赴こうとしましたが、北陸の形勢が不安定なため様子うかがっていたところ、羽柴秀吉に先んじられ、以後、秀吉の名声が高まるにつれて秀吉と対立するようになりました。天正11年(1583)越前にて秀吉討伐の兵を挙げますが、賤ヶ岳の戦いに敗れて居城北庄城で自刃しました。お市の方は、織田信長の妹にあたり、永禄10年(1567)、21歳で近江の浅井長政に嫁ぎます。長男、万福丸をはじめ、長女茶々(のちの淀君)、二女初、三女小督(のちの徳川秀忠正妻お江与)を生みます。やがて浅井長政と織田信長の同盟が崩れ、浅井長政は織田信長に敗れますが、お市の方と茶々、初、小督は救助されました。本能寺の変後、羽柴秀吉が織田家後継者として、信長の孫、三法師を立て、自身も盛り役として勢力を拡大します。お市の方は、織田信長の三男信孝の勧めを受け、柴田勝家と再婚します。北ノ庄城が秀吉軍に包囲され落城。柴田勝家とお市の方は自害します。



柴田勝家・お市供養墓



天鷲寺墓地の説明板にお市と柴田勝家の供養墓ありとある

伊達宗広隠居(自在庵)跡

- ▶ 伊達宗広は享和2年(1802)5月25日紀州藩士の家に生まれます。文化13年(1816)、紀州藩主 徳川治宝の小姓を任じられます。治宝はその宗広の才能を評価し18歳で藩の監察に任じます。その後、勘定吟味役、勘定奉行、寺社奉行兼務と昇進して500石取りとなります。
- 家老山中筑後守を補佐して藩政改革を推進する一方で、藩内の尊王論を主導していきました。
- 嘉永5年(1852)に山中筑後守、更には藩主 治宝が相次いで病死すると、改革に反対する派が推す家老水野忠央が実権を握ります。幕府からの信頼も厚かった水野は、藩内に危険な思想を広めたとして宗広は捕えられ、10年近くにわたって紀伊国田辺に幽閉されました。
- 文久元年(1861)、その才能を惜しんだ土佐藩 山内容堂の口利きによって釈放されると、養子である宗興に家督を譲って隠居します。
- 翌年、宗興とともに脱藩して上洛、尊皇攘夷運動に参加します。紀州藩は激怒し元治2年(1865)に和歌山に連れ戻され、再び幽閉の身となります。
- 明治維新後、実子の陸奥宗光が新政府に出仕すると、明治2年(1869)には幽閉が解かれ、宗興も和歌山藩執政に抜擢されました。
- 紀州藩は過酷な措置を行ってきたお詫びとして隠居料200石を与えました。



伊達宗広

宗広はその後歌道に専念し、大阪夕陽丘にある歌人藤原家隆の荒廃していた墓を修理し、その側の土地を購入し「自在庵」を設け、家隆の歌にちなんで家隆の墓所と自在庵のある場所を「夕日岡」と名付けました。

明治5年(1872)頃、宗広は病状が悪くなり、子の宗光宅のある東京深川清川町に移り住み、そこでも「和歌禅堂」という庵を営み、和歌と禅の道を講じていたそうです。

宗広は明治10年(1877年)5月18日に亡くなり、遺言により夕陽丘に埋葬されますが、陸奥宗光も同じ場所に埋葬されました。(昭和28年(1953)陸奥家墓所は現在の鎌倉に移転されています。)



伊達宗広隠居(自在庵)跡



夕陽丘から見た夕日

伊達宗広句碑

- ▶ 前記で紹介の伊達宗広が、ここ自在庵に隠棲していましたが、病のため宗光宅(東京)へ行くことになり、この地を去る際に次のような歌を詠みました。

空蟬の 殻は何處に 朽ちぬとも
我魂やどる かた岡ぞこれ

この句碑が伊達宗広隠居(自在庵)跡にあります。



伊達宗広句碑

- ▶ 伊達宗広は明治10年(1877)5月に病死。
遺言により宗光が隠棲した「自在庵」の地に墓を建て埋葬されました。
その後、陸奥宗光をはじめとして陸奥家の墓所となりました。
昭和28年(1953)、遺族が墓所を寿福寺(神奈川県鎌倉市)に移葬することとなりました。
しかし、現在でも当時の面影が残されています。



現在の陸奥家墓所跡(稱念寺)



陸奥家墓所(古写真)

陸奥宗光

弘化元年(1844)、紀州藩士 伊達宗広の六男として生まれました。
宗光が8歳のとき、父 伊達宗広は紀州藩の重臣でしたが、藩内の政争にやぶれて失脚したため、一家は貧困な生活を強いられるようになりました。文久3年(1863)、勝海舟の門下生になり坂本龍馬とともに海軍の勉強に励みます。勝海舟失脚後は坂本龍馬に従い、亀山社中、土佐海援隊の一員として活躍しました。龍馬が暗殺され、明治新政府が樹立すると外国事務局御用係、兵庫県知事、神奈川県令、地租改正局長などを歴任します。西南戦争後、政府転覆事件に関わったとして、除族のうえ禁錮5年の刑を受け投獄されました。明治16年(1883)1月、特赦によって出獄を許され、欧州に留学します。帰国後外務省に出仕し、明治21年(1888)駐米公使となっています。明治25年(1892)、第2次伊藤博文内閣のときに外務大臣に就任します。明治27年(1894)、イギリスとの日英通商航海条約を締結し、幕末以来の不平等条約である治外法権の撤廃に成功しました。同年8月、子爵を叙爵します。また、日清戦争の戦勝後、伊藤博文とともに全権として明治28年(1895)下関条約を調印し、戦争を日本にとって有利な条件で終結させました。この功により、伯爵に陞爵します。明治30年(1897)8月24日死去。浅草海禅寺で葬儀が行われ、同年11月に大阪の夕陽丘に葬られました。

<陸奥宗光 最初の妻 蓮子の墓碑>

明治元年(1868)宗光が大阪府権判事に就任した頃、蓮子と結婚しました。
宗光が神奈川県知事だった明治5年(1872)2月、蓮子は亡くなり、神奈川県「豊頭寺(ぶげんじ)」に埋葬されました。
しかし、父 宗広は明治10年(1877)に亡くなると蓮子の遺骨もこの地に埋葬されました。
昭和28年(1953)、陸奥家墓所が神奈川県鎌倉市の寿福寺に移葬された折、蓮子の墓碑だけ置き去りにされました。(遺骨は寿福寺に移されています)



陸奥宗光



陸奥宗光 最初の妻 蓮子の墓碑



蓮子墓碑の側面(豊頭寺に埋葬されたことが記載されている)

＜陸奥家墓所の菩提樹＞

以前、陸奥家墓所に菩提樹が4本あったそうですが、そのうち3本が枯れてしまったそうです。しかしながら、残りの1本は、まだ辛うじて残っており、貴重な史跡といえると思います。



今も残る陸奥家墓所の菩提樹

40 古河市兵衛寄贈の燈籠(稱念寺)

天王寺区夕陽丘町5-14

- ▶ 稱念寺にはいくつかの当時を偲ばせる燈籠が残っていますが、そのなかに「古河市兵衛」と記載された燈籠があります。古河家と陸奥家は姻戚関係にあります。陸奥宗光の次男である潤吉(母は蓮子)は、古河家に養嗣子として迎えられ古河財閥の2代目を継承しています。古河財閥の初代頭首が古河市兵衛です。



古河市兵衛の名が確認できる

41 夕陽岡阡表(陸奥宗光 先考 伊達宗広を吊う碑)

天王寺区夕陽丘町5-14

- ▶ 陸奥宗光は、明治10年(1877)5月に亡くなった父 伊達宗広の遺言に従い、夕陽丘に墓所を建て、さらにその傍らに宗広の生涯と事績を顕彰する「夕陽丘阡表(せんびょう)」という碑を建てました。

萩原延壽著の「陸奥宗光(下巻)」(朝日新聞社発行)には次のような記載があります。

「阡表」とは墓道に建てる碑の意味で、碑文は漢文で約千字、陸奥自らが筆をとって書いたものである。

以下に紹介するのは、その解説文の一部である。

夕陽岡阡表

夕陽岡は大阪四天王寺の北数百武(一武は三尺)の外に在り。其の二位壬生家隆卿(『新古今集』の撰者のひとり、藤原家隆)を葬るを以て、世呼びて家隆塚と曰ふ。先考(亡父)嘗て此地を過ぎ、卿倭歌を善くし、名古今に重くして、其塚即ち榛莽(くさむら)の中に埋没(うずもれる)するを悲しみ、購ねひて之を修し、卿の倭歌の中の詞を取り、以て此名を命じ、更に相攸めて其側に建碑し、歌を勒(きざむ)し、定めて留魂の場と為す。

陸奥家墓所が移転するにあたり、この地に移転してきた稱念寺さんによって、平成元年(1989)門前に移され、いつでも見れるようになっています。



夕陽岡阡表



夕陽岡阡表と陸奥宗光に追慕の意を表す碑についての説明板

42 原敬 陸奥宗光に追慕の意を表す碑

天王寺区夕陽丘町5-14

- ▶ 明治40年(1907)8月、当時、第一次西園寺公望内閣の内務大臣を務めていた原敬は、陸奥宗光に恩恵を受けました。原敬は、宗光の死から10年後、陸奥家墓所に「陸奥宗光に追慕の意を表す碑」を建碑しました。

萩原延壽著の「陸奥宗光(下巻)」(朝日新聞社発行)には次のような記載があります。

追慕の碑は、「阡表」とほぼ同じ大きさ(幅92センチ、厚さ20センチ、高さ320センチ)の石の表面に、まず陸奥の漢詩一篇(「詠史」、「福堂詩存」とほぼ同じ)、つぎに原の追慕の辞(原漢文)を刻んでいる。

三十六宮、苑色多し
霓裳 曲罷みて、流霞に酔ふ
紅塵百丈、長安の道
金馬門前、独り花を看る

金深く福堂陸奥伯の知遇を受け、相従ふこと有年、今茲に其十周年忌辰に値ふ。乃(すなわち)伯平生得意之詩を石に鐫り、諸墓の側に建て、以て追慕之意を表す。

明治四十年八月 内務大臣原敬拝誌
廣群鶴鏑



原敬 陸奥宗光に追慕の意を表す碑



原敬